シリーズ 城

調整課審査推進室　深草 祐一

# 第十四回　高遠城

## ～桜の名所には数多くの歴史が眠る～

高遠城址公園をご存知でしょうか。中央自動車道で諏訪のもう少し先、伊那市の奥にある城址で、ここに咲くタカトオコヒガンザクラは古くから天下第一の桜と称され、日本桜名所100選にも選ばれているそうです※)。毎年4月には関東からのバスツアーを含め多くの観光客が押し寄せるため、付近は大渋滞となるようですが、それ以外の季節、この城の歴史に魅力を感じて訪れる人はどのくらいいるのでしょうか。今回は高遠城に関するいくつかの歴史的エピソードをまとめて紹介しようと思います。

### 山本勘助

高遠は代々諏訪神社の神官を務めてきた諏訪氏の縁者である高遠氏が治めていましたが、武田晴信（信玄）の諏訪方面侵攻の中で、高遠氏もこの地を追われ、伊那郡は武田氏の支配するところとなりました。この時に高遠城は武田氏の手によって大改修されたのではないかと言われています。その縄張りを指導したのが武田の軍師・山本勘助であるという伝承があり、主郭から一段下がった曲輪には勘助曲輪の名が残されています。川の合流点の断崖突端を利用し、深い堀を隔てて二の曲輪、三の曲輪、南曲輪などを多重に配置した堅固な構えで、甲州流又は武田流と言われる、主に土の造形による築城術の一端を垣間見ることができます。

三峰川の断崖（右上方が高遠城）

曲輪を隔てる深い堀

### 仁科信盛の壮絶な篭城戦

長篠の戦の後、武田氏は急速に衰退し、満を持して織田･徳川の大軍勢が侵攻して来ます。その数、およそ5万。諸豪族が雪崩を打って織田方に降っていく中で、高遠城の仁科信盛（信玄の五男で勝頼の弟）だけは城に篭って戦う姿勢を崩しませんでした。しかし､城兵はわずかに3千。更に一門衆筆頭の穴山梅雪が徳川に通じてまさかの裏切り。これを聞いて諏訪の上原城に出陣していた勝頼も新府城へ引き上げてしまったため、高遠城内の動揺は大きく、とても戦える状態ではありませんでした。それでも信盛は降伏勧告の使者として送られた僧の耳と鼻をそぎ落として返し、断固として開城を拒否したため、織田軍

※ 長野県伊那市HP　http://www.inacity.jp/list.rbz?nd=88&ik=1&pnp=38&pnp=75&pnp=88

は力攻めに決し、大手門から一気に押し寄せました。勇猛で聞こえる信盛は最後まで奮戦しましたが、総大将の織田信忠（信長の長男）自らが武器を取って先陣に立つ織田軍の士気は天を衝くばかりで、山本勘助の手になるという堅固な構えもあっという間に突破され、城兵全員が討ち死にして落城したのでした。

この後、武田勝頼は一門衆である小山田信茂の裏切りに遭って天目山で自刃し、名門武田家はあっけなく滅亡します。織田軍の侵攻に対して抵抗らしい抵抗はほとんどなく、唯一高遠城の篭城戦だけが戦国最強といわれた武田武士の意地を見せた戦いだったのでした。

## 名宰相・保科正之

世は移り、徳川の天下と定まった頃、高遠城には武田の旧臣である保科氏が入っていました。そこに一人の男子が送られてきます。それは実は二代将軍徳川秀忠の隠し子で、恐妻家だった秀忠が公に秘して江戸から逃がした子でした。その子は武田信玄の次女である見性院の養育を受け、保科家の養子、正之として成長しますが、あるとき三代将軍家光がこの話を聞き、自分にまだ見ぬ弟がいたのかと喜んで呼び寄せます。正之の優れた資質を評価した家光は加増して幕府の要職に就け、これに感謝した正之も幕府のために大いに働き、後には大老をも務めました。家光の下には知恵伊豆こと松平伊豆守信綱などの切れ者が多く集まりましたが、保科正之もまた、諸大名を完全に押さえ込み確固たる幕藩体制を築き上げた中心人物の一人だったのです。

ひとつ、城に関する有名なエピソードがあります。明暦の大火（振袖火事）によって江戸の町はおろか江戸城の天守閣も焼け落ちてしまった時、既に2度の再建を行った日本一の規模を誇る江戸城天守閣の再建費用に悩む幕閣において、正之は、「天守は城の守りに役立つものではなく、ただ遠くを望み見る程度のものであり、今は幕府の工事を長引かせ国財を費やすべき時ではない。当分延期するのが適当。」として江戸の町の再建を優先する決断をしたため、それ以後江戸城の天守閣は再建されずに今日に至っているというものです。さすがの英断と言えますが、現代の城郭ファンとしては残念な話ではあります。

正之は最終的に会津23万石を賜り、幕末に活躍する会津藩の基礎を作ります。幕末に会津藩があれほど幕府に尽くしたのも、家光に大恩を受けた藩祖保科正之公の遺訓が連綿と受け継がれていった結果であるとも言えるのです。

## 絵島事件

最後にもう一つ、大奥の一大スキャンダルとして歴史に残る絵島事件について。第7代将軍家継の御世、大奥の万事を差配する御年寄の役にあった絵島が芝居役者の生島新五郎と密会したとして詮議を受け、最終的に連座者を含めて1500名以上が処罰されたというものです。絵島は実質流罪の高遠藩お預けとなり、質素な屋敷に軟禁されたまま生涯を終えることになりました。事件の裏には大奥内部の勢力争いがあったと言われ、この後、前将軍正室の天英院の勢力が優勢となり、結果として新井白石の追放や八代将軍吉宗の擁立につながったようで、日本の歴史に大きな影響を与えた事件でした。

絵島囲み屋敷

## 桜だけではない高遠城址

例年4月中旬には約1500本のコヒガンザクラが城中をピンク色に染め上げ、40万人もの人が訪れるそうです。天守閣どころか石垣も目につかない城址公園は、城としての印象がほとんど残らないかも知れません。しかし、景色の良さは三峰川の深い断崖に面した丘陵上という立地だからであること、青空に透かして桜を見上げているのは曲輪を区切る深く切り立った堀の底であること、そして片隅の盛り土はかつて塀や柵が巡らされていた土塁の跡であることなどを意識して見れば、かつて5万の織田軍を迎え撃った実戦的な城の姿が見えてくると思います。

近くの高遠歴史博物館の敷地内には「絵島囲み屋敷」が復元されています。また、私が訪ねた時、城内には「保科正之公を大河ドラマに」という幟がいくつも立っていました。桜の名所としてだけではなく、多くの歴史が眠る城址として、高遠城を訪ねてみて下さい。